

はっ くつ ちょう さ せい か げん ち せつ めい かい し りょう 発掘調査成果 現地説明会資料

1. 令和 8 年度 発掘調査の目的と概要

これまでの非破壊調査で得られた知見を実証・補完し、今後の適切な保存管理および未指定エリアの保護管理範囲の確定、史跡整備・活用へ向けた基礎データを取得することを目的としています。

調査期間	令和 8 年 7 月 20 日（月・祝）～ 令和 8 年 9 月 11 日（金）（予定）
調査主体・調査体制	富士市教育委員会（調査指導：富士市史跡保存整備推進委員会浅間古墳発掘調査部会） 筑波大学・明治大学・南山大学で考古学を専攻する大学院生・大学生総勢 12 名が調査に参加
調査目的・内容	・墳丘規模・範囲、遺存状態及び墳丘構築過程の確定（トレンチ掘削調査） ・周溝および古墳造成範囲の確定（未指定エリアの公有化・追加指定に向けた保護範囲の確定） ・活用施設ゾーンの遺構有無の確認
調査面積（予定）	約 560 平米

2. 浅間古墳の立地と周辺の古墳

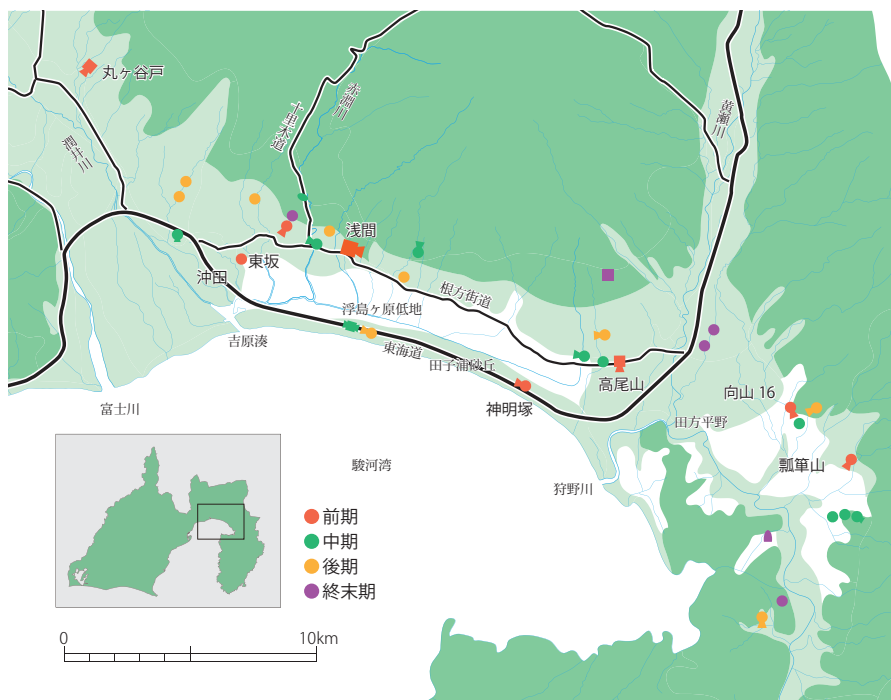
浅間古墳の位置する静岡県東部、駿河湾沿岸には多数の古墳が存在します。

浅間古墳が造られたと考えられる古墳時代前期（紀元 4 世紀頃）には浮島沼を囲むようにして前方後円墳（神明塚古墳、東坂古墳）や前方後方墳（高尾山古墳、浅間古墳）が造られました。これらの古墳の立地は、浮島ヶ原ラグーンからの視認性を強く意識したものであると考えられていますが、その中でも浅間古墳は最大の規模を誇る古墳です。

また、愛鷹山南麓全体では古墳時代を通じて 1000 基以上の古墳が、浅間古墳の位置する須津古墳群だけでも 200 基以上の古墳が造られました。その多くは古墳時代後期後半以降に造られたと考えられています（千人塚古墳など）。浅間古墳は須津古墳群の中でも最初の首長墓としても位置付けられます。

浅間古墳は愛鷹山南麓の丘陵上の、やや奥まったところに立地しています。浅間古墳は北よりも南から見た方が墳丘が高く見えます。これは、丘陵の地形を生かしながら、浮島ヶ原の方から見たときに、より大きく見えるように工夫したためだと考えられます。

（明治大学大学院 渡部颯大）



【図 1】 伊豆・東駿河における首長墓（30 万分の 1）

3. 調査成果



【写真1】 前方部側面の崩落石の状況



【写真2】 くびれ部から前方部側面の崩落石の状況



【写真3】 前方部基壇の状況

基壇～墳丘斜面

前方部南側面に存在する張り出し（「^{きだん}基壇」）については、その構造を明確化することを最大の目的としています。第2トレンチで設けたサブトレンチでは古墳時代以前に堆積した土の上に^{ふんきゅうすそ}墳丘裾付近の基壇から墳丘の一部にかけては元の地形を削り出すことによって築造しているとみられます。

墳丘斜面からは崩落してきた^{きだん}基壇が大量に確認されています。斜面最下段には大型の石材が現状の墳丘ラインに沿うような形で並んでおり、^{ふんきゅうすそ}墳丘裾の土台となる「^{きていせき}基底石」を検出している可能性があります。また、斜面上部にも人頭大の^{きだん}基壇が並んでいる様子が確認されており、こちらも一部、当初の状態を保っているとみられます。遺物としては、上部から転落してきたとみられる土師器が、第2トレンチ斜面でまとまって出土しています。

（筑波大学大学院 三田寺将）

くびれ部

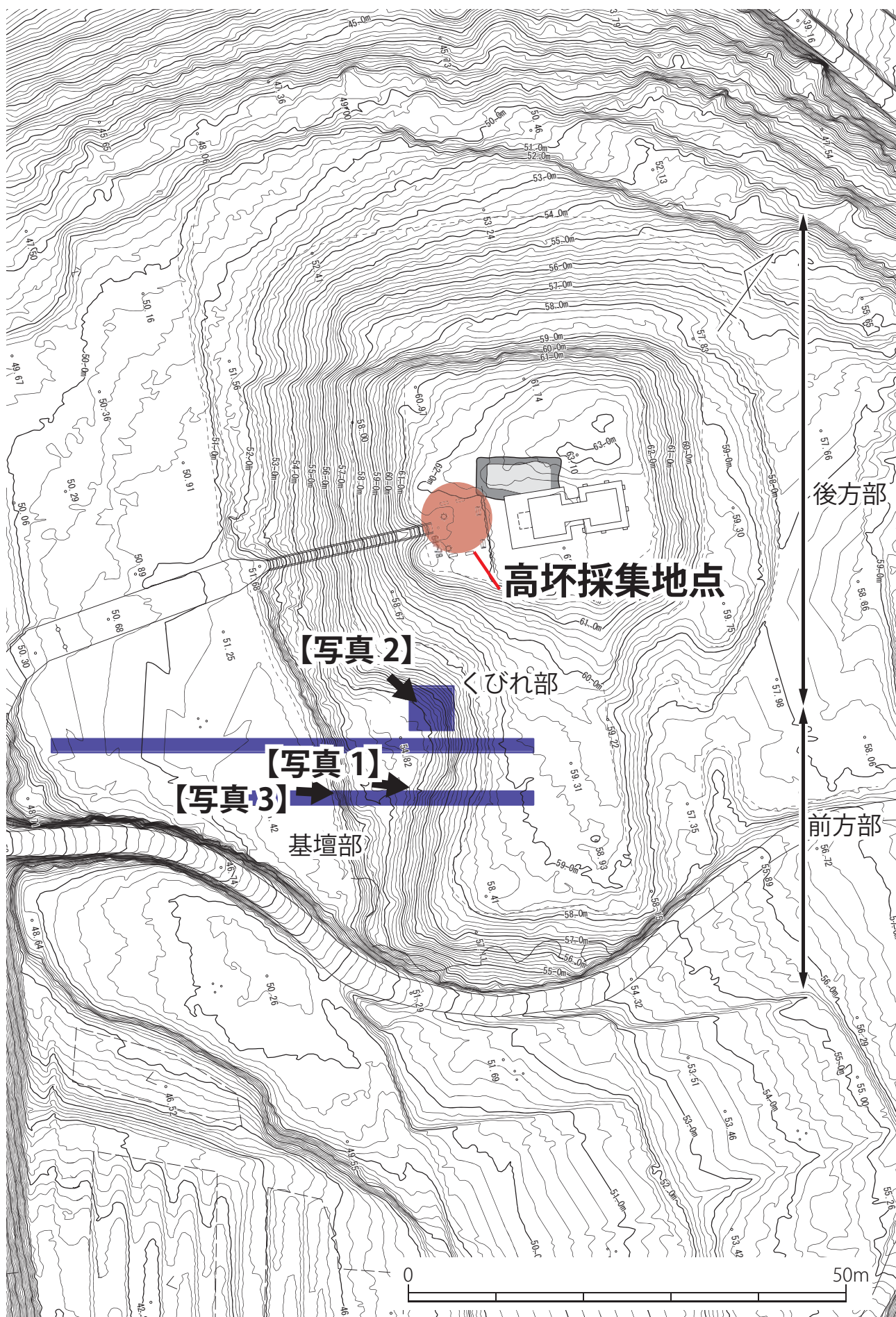
前方部と後方部の結合部分をくびれ部と言います。くびれ部の形状や構造の解明を目的として、第3トレンチを設定しました。前方部側の斜面では、比較的新しい時期のものと思われる崩落石がまとまって検出されました。その下の層には、古墳築造以降に降下した^{かざんさいせつぶつ}火山碎屑物（^{おおぶち}大淵スコリア）が検出され、特に墳丘裾部ではスコリアが純層に近い状態で堆積していました。こうしたスコリアの層の下には古墳築造当初に近い墳丘構造が良好な状態で残されていると思われます。深く掘削したサブトレンチでは、古墳時代の表土と地山（自然堆積）が削られている様子が確認できました。

（筑波大学大学院 松村駿輝）

基壇と裾

墳丘裾の平坦面では、古墳を作る際に造成した面や、^{しゅうごう}周濠の有無、基壇の立ち上がりについて確認することを目的に調査を進めていますが、平坦部についてはすでに大きく削平を受けているようで、当時の姿を明らかにすることはできませんでした。また、基壇についても、上層で^{かんえいつうほう}寛永通宝（江戸時代のお金）が出土したため、こちらもすでに江戸時代に手が加わっているようです。

（明治大学大学院 渡部颯大）



【図2】 浅間古墳トレンチ配置図・土器採集地点図（600分の1）

4. 過去の調査成果

(1) 前方後方墳と判明するまで

浅間古墳は戦前には前方後円墳として報告されていましたが、その後1957年に浅間古墳が国指定史跡に指定される際、静岡大学の内藤晃氏による測量調査によって、はじめて前方後方墳であることが示されました（富士市教育委員会 2025）。

(2) 墳丘測量調査

1997年に静岡大学人文学部考古学研究室によって再び詳細な測量調査が行われ、後方部二段、前方部一段構成、墳長約90mの前方後方墳であること、また埴輪を樹立する可能性は低いことなどが示されました（静岡大学人文学部考古学研究室 1998、富士市教育委員会 2025）。

(3) 地中レーダー調査

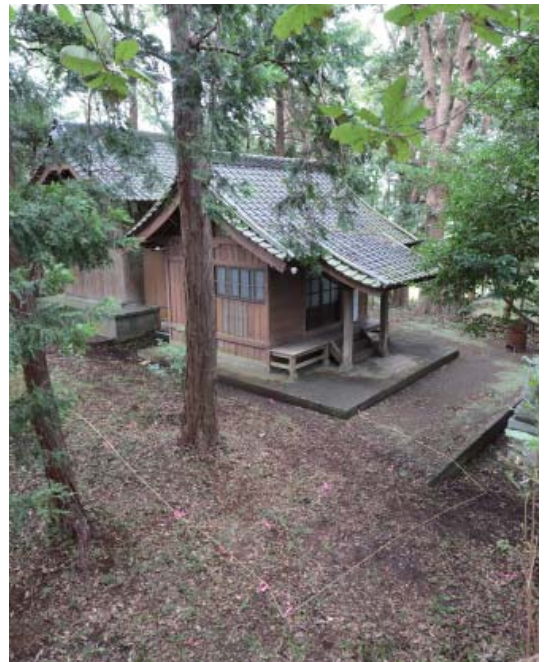
2019年に富士市教育委員会が埋葬施設の把握のために墳丘平坦部全体の地中レーダー探査を実施したところ、後方部墳頂の地表から2.0～2.5mの深さで約9.5m×6.8mの範囲に異常反応が確認されました。この解析結果から、後方部主軸直交方向において、石材などを使用した構造体に囲まれた竪穴式石室などの埋葬施設が存在する可能性が把握できました【写真4】（富士市教育委員会 2025）。

(4) UAV 測量調査

2020・2021年に富士市教育委員会は古墳の選地や工法について把握するために、浅間古墳を中心に300×450mの範囲でUAV（ドローン）を使用して詳細な等高線図・陰影図を作成しました【図3】。

作成された図からは、浅間古墳は南側からの視認性を強く意識して作られたために南側と北側の高さに違いがあること、90m級の古墳を築造するために丘陵先端部ではなくやや奥まったところに築造されたことが推測できます。

（筑波大学大学院 加藤 諒）



【写真4】 埋葬施設推定範囲



【図3】 陰影図（4000分の1）

参考文献

静岡大学人文学部考古学研究室 1998「静岡県富士市 国指定史跡・浅間古墳測量調査の成果」『静岡県の重要遺跡』（静岡県内重要遺跡詳細分布調査報告書）静岡県教育委員会
富士市教育委員会 2025『国指定史跡 浅間古墳 保存活用計画』

令和8年度

国指定史跡 浅間古墳
発掘調査成果 現地説明会資料

編集・発行：富士市教育委員会 文化財課
富士市伝法 66 番地の 2
TEL 0545-30-7850

発行年月日：令和8年8月22日